

【書籍自己紹介】

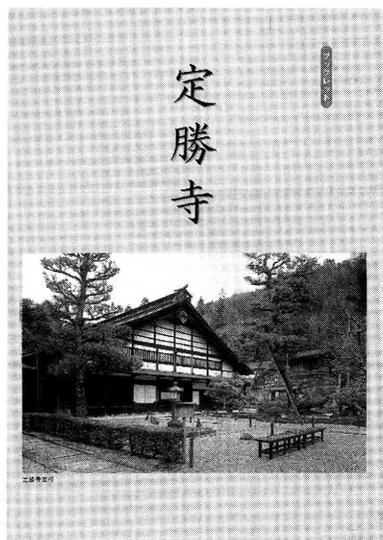
『ブックレット 定勝寺』

山本 英二

執筆の背景

本書は、長野県木曾郡大桑村須原に所在する臨済宗妙心寺派浄戒山定勝禅寺の歴史を記したブックレットである。定勝寺は、山門、庫裡、本堂が国重要文化財に指定された木曾谷屈指の古刹である。くわえて木曾では、最も古く開創された寺院であるのみならず、近年「そばきり」と記された日本最古の文書を所有することで、つとに知られるようになった。

本書を刊行することになったきっかけは、いまから5年前、2000年にさかのぼる。当時、定勝寺の古典籍調査をされていた日本近世文学の研究者で、中央大学文学部教授鈴木俊幸氏を介して、同寺の古文書調査を依頼されたことが発端である。同寺の古文書については、中世文書は以前から調査されていたものの、近世以降のものは、一部が『長野県史』などに紹介されただけで、その全貌は不明なままであった。これは長野県に限らず、戦後の近世史研究では、もっぱら農村の名主文書を中心に調査を進めていたため、寺院や神社文書は、



未整理のまま放置されてきたことに原因がある。また古文書目録を編成して悉皆調査をするのは、時間と労力がかかり、自治体史編さんでもなければ、なかなかむずかしいものでもあった。

ところが2000年9月、定勝寺松葉文弘住職と、檀家惣代川合仁志さんらのご好意により、文庫蔵への立入調査が認められ、蔵の二階に大量の近世古文書が所蔵されていることが確認できた。文書は、かつて中央線を走っていた蒸気機関車の煤煙により、やや煤けていたことを除けば、大変良好な保存状態であった。

さらに幸運なことに、翌2001年から4年間、山本を研究代表者とする日本学術振興会・科学研究費基盤研究Cが採択され、その研究費の一部を調査資金に充てることが可能となった。

また2005年に新住職・松葉文昭和尚の晋山式が控えており、その折りに定勝寺史を檀家に配布したいとの要望があって、きわめて積極的かつ好意的に調査を実施できたのである。

そして信州大学人文学部の学部生、あるいは学習院大学や國學院大学の大学院生の調査協力を得て、一気に古文書目録整理が進められたのである。

こうして4年間の古文書整理の成果は、2005年3月、科学研究費研究成果報告書別冊というかたちで、信州大学人文学部日本史研究室編『長野県木曾郡大桑村須原定勝寺古文書目録』として刊行することができた。整理ののち目録に編成された定勝寺文書は、総点数1,551点に及ぶ。

本書の構成と内容

『ブックレット定勝寺』は、以下のような6章から構成されている。ちなみにカッコ内は執筆者の名前である。

第1章 定勝寺の歴史と沿革（山本英二）

- 第2章 回向文から見た美濃と信濃の国境（山本英二）
- 第3章 定勝寺の大般若経音義（山田健三）
- 第4章 そばきりの発祥と定勝寺（山本英二）
- 第5章 定勝寺の古典籍に見る木曾の文化（鈴木俊幸）
- 第6章 山陵奉行戸田忠至と定勝寺（山本英二）

本書では、調査の成果について、最新の知見と学問的な水準を確保しつつ、できるだけ檀家の方々を始めとする一般向けに叙述することを心がけた。そこで本書の体裁はブックレット形式を採用した。ブックレットなら、活字のポイントを大きくして、難しい用語にはルビを施し、写真を豊富に入れて、読みやすくすることができるのである。また定勝寺を拝観に訪れた観光客向けのパンフレットとしても販売できるように考えたこともある。

執筆者は、日本史研究者である山本が第1・2・4・6章を、日本語史研究者の山田健三（信州大学人文学部）が第3章を、そして日本近世文学研究者の鈴木俊幸（中央大学文学部）が第5章をそれぞれ分担執筆している。このような日本史・日本語史・日本文学の研究者により、学際的に執筆されたことが、このブックレットの特筆すべき事柄である。

第1章は、定勝寺の創建から江戸時代までの歴史を概観したものである。定勝寺はもともと南禅寺や東福寺といった京都五山派に属していたが、戦国時代から江戸時代初期に妙心寺派に属するようになった。そして15世紀末以降、木曾谷において一大勢力となった木曾氏を大檀那として、寺院の規模を拡大していくのである。

第2章では、新たに発見された回向文（仏事の最後に唱える経文を記した文書）を利用して、木曾地域が美濃国から信濃国に移行した時期を特定している。平成の大合併では、木曾郡山口村が、岐阜県中津

川市と越県合併することで大問題となったことは記憶に新しい。しかし歴史をさかのぼると、木曾谷はもともと美濃国（現岐阜県）に属していたのであり、中世から近世にかけて信濃国、すなわち長野県に属するようになったという経緯がある。だがいったいつごろ美濃国から信濃国になったのかについては、確証はなかった。ところが今回、定勝寺の古文書整理の過程で、15世紀から16世紀の中世の回向文が12点発見された。中世文書がこれほどまとまって新出するのは、きわめてめずらしい。しかも最も古い延徳3年（1491）の回向文には、「大日本国美濃国恵那郡木曾庄」の表記があり、15世紀末期までは、現地では木曾は美濃国と認識されていることが判明した。また永正4年（1507）に死亡した住職が記した年未詳の回向文では、「日本国信州路木曾荘」と見えることから、16世紀初頭に木曾は信濃国に変わったことが確定したのである。

第3章は、定勝寺所蔵の大般若経音義について、詳しく解説したものである。音義（音義書）とは、大般若経に用いられている漢字・漢語について音や訓を記した辞書的一种である。定勝寺の音義は、明応4～5年（1495～96）にかけて書写されたもので、折本5帖から構成されている。定勝寺のように書写年代がわかり、なおかつ欠本のないものは全国的に貴重である。そして音義によって中世日本における漢字・漢語受容の歴史的経過や、日本語の変化の過程を知ることができるのである。

第4章は、全国でも屈指のそばどころである信州ならではの考察である。従来、ソバを麺状に加工して食べる習慣は、いつ、どこで始まったかについて定説はなかった。発祥地は甲斐国（現山梨県）とも、信濃国ともいわれ、発祥の時期は江戸時代の寛永年間とも元禄年間ともいわれていた。しかし定勝寺の記録では、天正2年（1574）には、すでに「そばきり」が食べられていたことが第一次史料から判明する。

いってみれば、木曾の定勝寺こそがそばきり発祥の地なのである。

第5章は、定勝寺の古典籍を素材に、木曾谷の文化を述べた章である。定勝寺には、古文書とは別に、約550点の古典籍が所蔵されている。これらの蔵書は、江戸時代初期から連綿と蓄積されてきたもので、木曾谷が誇る貴重な古書籍群である。このなかには禅宗関係の仏書が豊富なことはいうまでもなく、寛永時代までに出版された古版本、木曾福島山村代官が印刷した地域出版物も数多く含まれており、江戸時代における木曾谷の知的水準の高さをほうふつとさせる。

第6章は、定勝寺の檀那であった宇都宮藩家老で、山陵奉行に抜擢された戸田忠至と定勝寺の関係を概観した章である。山陵というのは歴代天皇や皇后の陵墓のことで、幕末期に大規模な修復がおこなわれた。この修復のリーダーが山陵奉行である。戸田忠至は、もともと間瀬姓を名乗り、定勝寺の檀那であったことから、間瀬家先祖の菩提に関する史料と、山陵修復に関する書状などが残されている。そして定勝寺は幕末維新期には中央の政局に関わりが深かったのである。

このように、本書は、従来型の寺史とは異なり、あらゆる事柄を網羅的に述べるものではなく、4年間の調査によって新たに判明した事実を、トピックスとして取り上げたものである。そして各章の記述は一般向けの啓蒙的な文章であるが、最新の研究成果を盛り込んであり、学問的価値はきわめて高いと自負している。

ぜひ一度手に取ってもらい、できれば定勝寺に足を運んでいただきたいと念願している。なお本書は、非売品であるが、購入希望の場合は、定勝寺まで直接ご連絡頂ければ、実費負担（本代・送料）で入手可能である。連絡先は、〒399-5502 長野県木曾郡大桑村須原定勝寺 電話0264-55-3031まで。

(やまもと・えいじ／信州大学人文学部助教授)